

「SVKリーディング」：高等専門学校高学年学生のための

アウトライン・リーディングの提案

“SVK Reading”: A Proposal for an Outline Reading Method for Students

in Higher Grades in the College of Technology

永井 誠 1)

NAGAI Makoto

Abstract

This is a proposal for a teaching method in English reading classes for students in higher grades in the college of technology. The main idea of this method is to grasp the outline of advanced reading materials in the technological fields by understanding [subject+ predicate + key word]. It has three stages; (1) to distinguish between predicate/non-predicate verbs to understand the pair of [subject + predicate], (2) to distinguish between “sentence”(main structure) and “clause”(sub structure), and (3) to distinguish between compound and complex sentence structures.

Keywords: reading comprehension, outline reading, technological field, subject, predicate, key word

1. はじめに

高等専門学校卒業生が企業や大学で英文を読む際に、その英文のレベルと英語の授業で使った教科書のレベルとのギャップが問題になることがあり得る。また実社会では時間をかけて精密に「和訳」するよりも、短時間でより多くの内容の「大意」を取るの方が要求されると思われる。英文読解の指導に関してはこれまで様々な角度から様々な提案がなされているが、本稿では工学系学生の将来のニーズを考慮した一つの提案を行いたい。

2. アウト・ラインリーディングとは

「アウトライン・リーディング」とは読解における所謂「大意取り」と言えるが、これまでになされている提案の中でこれに該当するまたは関係と思われるものは、precise reading に対する rough reading (粗読)、intensive reading に対する extensive reading (多読)、slow reading に対する rapid reading (速読)であろう。そのスタイルとして、skimming (すくい読み) や scanning (検索読み) が挙げられ、skimming の技術の例としてパラグラフ先頭文だけを読むこと、scanning の技術の例としてキーワードを探しながら読むこと、などが挙げられる。これらのスタイルや技術は読解全般に関わることだが、高専生にと

って有益なリーディング技術とはどのようなものであろうか。

物語文や紀行文とは異なり、理工系の文章で特に重要なのは命題構造であろう。例えば、「A が B する」ならば「C が D になる」、(X は Y である) と「Z が 証明した／報告する／考えている…」などの構造である。そのために必要なのは、意味要素の抽出とそれらの関係の図式化である。

本稿は、最小限の文法的要求から最大限の効果を引き出すことを目的とし、以下に本稿が「SVK リーディング」と呼ぶアウトライン・リーディングの方法を紹介する。この呼び名は主語 (Subject) 述語 (predicate Verb) キーワード (Key word) から来ている。

基本は「主語＋述語 (+キーワード)」を押さえ、文の骨組みを文法及び意味の両面から捉えることを目指すものである。授業において英文を読む際に、「骨組み」を押さえたらそれで良しとして「和訳」をせずに進み、どんどん多くの英文を読ませることである。骨組みを押さえるということは具体的には、「何がどうした」「誰がどんな状態だ」「この文には～というキーワードがある」などを理解することである。学生の作業としては、英文に S, V, K などを書き込むだけで十分な場合はそれで良しとするが、特に複雑な文に関しては別紙に「構造分析メモ」を書かせることが有効である (資料編に具体例有り)。

3. 複数の段階

3.0. 前段階：「品詞」の概念

このメソッドにはいくつかの段階がある。本来は3段階だが、前段階として品詞の概念の理解が必要である（そう考えれば4段階）。内容語の4品詞（名詞・形容詞・動詞・副詞）を中心に、ある程度簡略化して教えても良いが、名詞と動詞の理解だけは必須である。

3.1. 第1段階：「主語＋述語」の理解

第1段階の目標は、まず動詞を見たら述語か非述語かを区別し、その理解に基づいて[主語＋述語]のペアを理解することである。そのためにはまず「動詞」と「述語」という用語の整理が必要である。文法書には「主語と動詞」という記述がよく見られるが、これは文構造分析の2つのレベルをまたいでおり、学習者に混乱を起こさせる原因となっている。主語に対して述語（統語機能）、名詞に対して動詞（品詞）、という別レベルの分析が適切である。一つの文に動詞が一つしかない場合はそれが述語だから問題はないが、問題なのは「動詞はたくさん使われているがどれが述語か分からない」というケースであり、これがこの段階のポイントとなる。

主語と述語を指摘する際には、どこからどこまでが主語なのか、主部と主語はどう違うのか、助動詞は述語に入るのか、など様々な疑問が生まれるかもしれない。ここでは文法構造の厳密な理解が目的ではないので、これらに関しては以下のようにある程度幅を持った理解でよいと思われる。

主語＝名詞（＋α）、述語＝動詞（＋α）

特に、BE動詞が述語の場合は柔軟に扱うべきである。進行形や受動態の場合はその後に来る分詞が主役であるのはもちろんであるが、それ以外で後に来る（5文型で言う）「補語」も述語に含めることを認めても良いと思われる。逆に、述語の意味が「～である」だけでは骨組みとしても少々貧弱であるとも言える。

（具体的には資料編の **教材1** を参照のこと）

3.2. 第2段階：「節」の理解

文法書では複文の「主節」や「従属節」という記述があり、それだけで独立した「文」になり得る「主語＋述語」も、「関係詞節」や「疑問詞節」のように「文」になり得ない「主語＋述語」も、両方とも「節」と呼ばれている。この同一の呼び名は学習者が文構造を理解する際に有益とは考えられない。

第2段階ではこれらを区別し、前者を「文」、つまり「文の中の文」と呼び、後者だけを「節」と呼ぶ。そして、節を文中の様々な位置で使われる「パーツ」という位置づけにすることが文構造理解にとって有益である。

代表的な節として、以下のものを理解しておくとならぬ。理

解に有益である。

「that 節」（同格および内容）

「関係詞節」

「疑問詞節」

「whether 節／if 節」（疑問詞節の仲間）

そしてこれらが文の主語になるケース（最もわかりにくい）、目的語になるケース、修飾部分に使われるケースなど、様々なパターンを理解することが文全体の構造の理解に有効である。

（具体的には資料編の **教材2** を参照のこと）

3.3. 第3段階：文と文の「接続パターン」の理解

複合文は、第2段階で「節」と区別した「文の中の文」が複数組み合わさったもので、その組み合わせのパターンを理解することが文構造の理解にとって有益である。代表的なパターンとして以下のものを理解する必要がある。

「単純並列型」

「(サブ文) 前置き修飾型」

「(サブ文) 後付け修飾型」

サブ文はその前の接続詞とセットとなり、メイン文を前から修飾することもあるし後ろから修飾することもあるが、第3段階ではこの関係を図式化してビジュアルに理解させることによって文構造の理解を助けることを目標にする。

（具体的には資料編の **教材3** を参照のこと）

4. 結び

このメソッドには三つの段階があり、これを活用するには学生が各段階を確実に昇って行かなくてはならない。そのためには、低学年から高学年にかけて何をどのように教え、その習得をどう確認するかについて英語教員が共通認識を持つことが必要である。

このメソッドによる構造理解はあくまでも手段であり、目的は内容の理解である。内容に焦点を当てた読解の態度を身につけるには専門（工学）教員と英語教員の連携が有効であると思われる。専門教員が英文を使って工学的内容を学生に説明する／ヒントを与えて考えさせる際に、学生が英語の授業ではどのように教わっていてどのような技術を身につけているかを把握していれば能率がよい。また逆に、実際に工学的内容を英語で扱う際に学生がどのような点で躓くか、どのような力を身につけることが望ましいかなどの点を英語教員にフィードバックすると、両者の教育内容にとってさらなるプラスになると思われる。

5. 参考文献

- [1] 門田修平ほか. 英語リーディングの認知メカニズム. くろしお出版. 2001
- [2] 門田修平. 英語の書きことばと話しことばはいかに関係しているか. くろしお出版. 2002
- [3] 金谷憲. 英語リーディング論. 河原社. 1995
- [4] 小池生夫(編). 第二言語習得研究に基づく最新の英語教育. 大修館. 1994
- [5] 小池生夫(編集主幹). 第二言語習得研究の現在 - これからの外国語教育への視点 - 大修館. 2004
- [6] 津田塾大学言語文化研究所読解研究グループ(編). 英文読解のプロセスと指導. 大修館. 2002
- [7] 松村幹男(編). 英語のリーディング. 大修館. 1984

資料編

教材1 難解英文の読解法：骨組みの理解から徐々に (1)

英文を読む際に、そこに使われている全ての語彙を知っており全ての文法構造が理解できれば、完璧な和訳ができるかもしれない。しなしながら、ある程度レベルが高い文（実際に世の中で使われている文）となるとそれは困難である。実社会においては、教科書のような短い平易な文章を完璧に訳せることよりも、長い難解な文章を（理解できない部分を一部残しつつも）全部読み通してその大意（主旨）をつかめることの方が有意義である。難しい英文を読むときには、文構造を予想しながら分析的に読み、まず文の骨組みを理解し、徐々に他の要素を理解するという「段階」を経て、理解できる範囲で理解するというアプローチが有効である。

ここで言う「文の骨組み」とは、文法的には【主語＋述語】の組み合わせで、意味的には文脈上の【キーワード】である。キーワードは、例えば電流・電圧の話題だったら「数値」「上昇/低下」関係の単語かもしれないし、機械・設備の組み立ての話題だったら「部品」や「手順」関係の単語かもしれないし、あるいは「特になし」の場合も多いと思われる。

※重要：動詞＝述語とは限らない

文構造の分析において最も重要なのは「動詞」である。ここで混同してはならないのが、「動詞」と「述語」であり、この両者は区別すべきである。よく「主語と動詞」と言われるが、これは二つの分析法を混同しており、正しくは「主語と述語（統語機能上の呼び名）」、「名詞と動詞（品詞上の呼び名）」というように分析法を区別すべきであろう（主語には名詞が使われ、述語には動詞が使われる）。

1 動詞の区別：「述語」or「非述語」 →述語を見つけ、主語と合わせて「意味の骨組み」を掴む

動詞は動作や状態を表すものだが、述語だけでなく目的語にも補語にもなるし、修飾語や主語（及びその一部）にもなる。その動詞がどんな役割をするのかを誤解すると文構造が見えなくなる。まずは、動詞を見たらそれが述語か非述語かを判断することから始める。つまりペアとなるべき主語があるかどうかを判断することになる。そして主語と述語の意味が分かれば、取りあえず文法上の「骨組み」は分かることになる。

具体的作業：文中の全ての動詞にアンダーラインを引き、それが述語の場合（ペアとなる主語がある場合）にはその下にVと書く。同時にその主語となる名詞の下にSと書く。

例1→ Before understanding the actual condition of the factory, the new engineer from the company merged

S

last month determined to start manufacturing the product in order to keep the facilities operating.

V

※ この例において動詞は6語あるが、述語はそのうちの1語のみである。述語とその主語が分かれば、文全体の【意味の骨組み】は「--技術者が+-決定した」であることが分かる。

例 2→The epoch-making computer designed by the notorious company is sold all over the world.

S

V

※ 述語が BE 動詞の場合は、それに続くもう一つの要素（進行形の—ing や、補語、場所..など）と合わせて一つの述語と解釈した方が、意味の骨組みを捉える上で有益である（「～である」だけでは情報不足だから）。この場合の意味の骨組みは「--コンピュータが ++売られている」となる。

構造分析メモ（単独文）

文 [S: --コンピュータが (は) + V: --売られる] (K: なし)

※S=主語、V=述語、K=キーワード

参考 1 : 単独文（主語+述語）の基本パターン

主語+述語（基本型）

述語+主語（倒置：文体上の工夫） In front of the old house lies a vast field of barleycorn.

V

S

述語+主語（倒置：there BE 存在文） There were many young people in the hall.

V

S

仮主語+述語+真主語（to+動詞／that 節） It is surprising (that John passed the test).

S' V

S

(s) (v)

教材 2 難解英文の読解法：骨組みの理解から徐々に (2)

「文」と「節」の区別：主語+述語＝「文」とは限らない

主語と述語の組み合わせがあっても、それが文中の一つのパーツを形成・修飾しているに過ぎない場合がある。これを「節」※と呼び、文と区別しよう（イメージ的には「文の中の文」「文もどき」）。

節を文と混同すると本来の文構造を見誤る。例えば、(Tom が買ったその本)を「Tom はその本を買いました」と誤解してはいけない。

例：(the book that Tom bought) → 「節」 / Tom bought the book. → 「文」
(s) (v) S V

※多くの文法書では、後で述べる「メイン文」・「サブ文」も「節」と表現しており、学習者の混乱の原因になっていると思われる。この教材ではこれらは区別する。

2-1 様々な「節」の例

内容の that 節 (that John passed the test) : (John がテストに受かった ということ)
(s) (v)

同格の that 節 (the fact that John passed the test) : (John がテストに受かった ということ)
(s) (v)

※ the fact の省略とも解釈できる。さらに、口語の場合この that は省略されることがある。
ex) I know John passed the test.

- 関係詞節 (the engineer who made this program) : (このプログラムを作った技術者)
(s) (v)
- 疑問詞節 (what you know) : (あなたが知っていること / あなたが何を知っているか)
(s) (v)
- (where she lives) : (彼女が住んでいる場所 / 彼女がどこに住んでいるか)
(s) (v)
- その他 (whether it is true (or not)) : (それが本当かどうか)
(s)(v)

※ whether は本来接続詞だが、疑問詞と同様に名詞節を形成することもある。

2-2 節の位置・役割：同じ節が文全体の**主語**になることも**目的語**や**補語**になることもある。

(The bookshop where I bought this book) is near the school. (主語)

Do you know (the bookshop where I bought this book)? (目的語)

具体的作業：主語や述語が「節」のものだと判断したら、それぞれ(s),(v)のように括弧を付けて「文」の主語 S・述語 V と区別する。同時にその節を括弧で囲み、文中の一つのパーツであることを視覚的に捉える。次に、そのパーツが文中のどのような役割であるかを考える。(重要なのは**主語**であるか否か)

例→(The book shop where I bought the book on horticulture) is near the chemist's.

S (s) (v) V

※文の構造が見えにくい時には、本文に記号や括弧を書き込むだけでなくノートや別紙に「構造分析メモ」を書き出して自分の理解を整理する。

構造分析メモ (内包文)

文 [S : --店は + V : --近い]
節 ((s) : 僕が + (v) : --買った → 店) (K : 近い)

文の意味 (分かる範囲で) :

(僕が --の本を買ったその書店)は --に近い

教材 3 難解英文の読解法：骨組みの理解から徐々に (3)

複数の文の関係・並べ方のパターンを理解する

英文は[主語+述語]の組み合わせが1組の「単独文」ばかりではない。その組み合わせが複数ある「複合文」がよく使われ、その組み合わせのパターン(文と文の関係)を理解することが有益である。

1. 単純並列型

[I like sports] but [I have no time].

S V ☆ S V

(↓ 関係を視覚的に捉える。☆は接続詞。)

[S + V] ☆ [S + V]

2. サブ文前置き型

[Because you did a good job], [I'll give you a bonus].

☆ S V S V

サブ文(修飾) → メイン文

[☆ S + V], [S + V]

難解英文の読解法：まとめ

難解な文を読む時には、文法構造の骨組み（主語＋述語）を分析し、文脈上のキーワードを押さえることによって文の大まかな意味を理解する（完璧な日本語に訳せなくてもよい）。それぞれの段階で必要に応じて、全体の構造に関する理解を整理するために「構造分析メモ」を書く。

作業の手順

第1段階 動詞を全てチェックし、主語＋述語の組み合わせを理解する。

第2段階 主語＋述語の組み合わせが「文」のものか「節」のものかを区別する。節がある場合、それが文の主語／目的語...などのどれであるかに注意する。

第3段階 文が複数ある場合、単純並列の関係かメイン／サブの関係（修飾）にあるのかを区別する。